

修学旅行に関連付けた探究的な小説読解の実践

海城高等学校 岡崎 匠吾

一、はじめに

学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められており、高等学校では探究学習も必修となった。講義型の一斉授業から協働的な学びへの転換が要請される中、生徒が能動的に学習課題に取り組み、より質の高い理解に至る授業をいかに設計するか——。これが現場の教員にとっての大きな課題である。

本稿では、修学旅行の事前学習として取り組んだ探究的な小説読解の試みを紹介し、実践の成果と課題について考察したい。

二、教材観

主教材として目取真俊「魂込め」^{まぶいぐみ}を用いた。「魂込め」は、霊能力を持ち村落の「神女」^{かみんぢめ}を務める主人公のウタが、「魂」^{まぶい}を落として身体をアーマン（オカヤドカリ）に乗っ取られた幸太郎の魂を戻すべく「魂込め」を行う様子を三人称視点で描いた小説である。作品では随所にウチナーグチ（沖縄の言葉）が用いられ、「神女」やニライカナイ信仰、本土に対する沖縄の

人々の屈折した心情、沖縄戦の様子等が描かれており、修学旅行で沖縄を訪れる生徒（高校二年生）にとって、言葉・文化・歴史など多様な側面から沖縄を知るのに相応しい教材である。

三、生徒観

本授業は二年生の文系生徒を対象に実施した。文系の生徒ということもあつて国語学習への意欲は概して高いといえる。評論文の要旨を掴むことも比較的得意だが、観念的に理解しがちであり、自分の身近な事例に引き付けて理解しようという姿勢はやや希薄である。小説の読解においても、分かりやすいストーリーを求め、人情の機微や複雑な心情を読み取ることは課題がある。それは、初読時に「ハッピーエンドを期待していたが裏切られた」、「魂込め」が成功せず、幸太郎が死ぬという結末に驚いた」といった類の感想がそれなりの数に上ったことにも端的に表れている。沖縄戦で亡くなった幸太郎の母・オミトの霊魂が海亀やアーマンに姿を変えて息子を「あの世」に呼び寄せているよう

にも読める部分があるが、「母親なのに、なぜ妻子がいて幸せに暮らす幸太郎の命を奪うのか」という疑問を持った生徒も複数いた。初読段階では、乳飲み子を残して戦場で理不尽にも命を落とした若い母親の心情を理解するには及んでいない生徒も多いように思われた。沖縄について多面的に知ることを企図した授業ではあるが、国語である以上、登場人物の心情を深く理解することは必須の学習事項であろう。

生徒はパソコンを使って調べたことをまとめたり、それを発表したりすることを国語に限らず様々な場面で行っており、そうした活動への意欲も高い。本授業でもグループワークや端末を活用したスライド発表などを組み込むことで、活発な学習活動になることを期待した。

四、授業にあたって

ここでは、授業の構想について記す。前述のように、「魂込め」は言葉や文化、歴史など、沖縄について多面的に知り、考察するのに適した教材である。一方、短編小説とはいえ、授業

で扱うには分量が多く、心情の読み取りも簡単にはいかない。作品の叙述に沿って発問し、講義していくというスタイルでは生徒の緊張感が続かず、沖繩について多面的に考察するつもりが、かえって興味・関心を喪失させる結果にもなりかねない。そこで、あらすじの確認や沖繩の文化などの背景知識についてグループワークで学習させることとし、調べて考察したことを発表するという目標を持たせた。調べ学習においては、パソコンを活用することも可としたが、インターネット上の情報は玉石混濁であるため、新宿区立図書館の協力を得て関連図書を教室で閲覧できるようにした。また、沖繩の言葉に触れ、作品の雰囲気を感じてもらいたいと考え、時間はかかるがえて全文を音読させることとした。以上がいわば「前半」であり、「後半」で文章のポイントとなる部分について問いかけ、読解するというプロセスを辿ることで、より深い読解になるよう授業計画を立てた。「仕上げ」として沖繩戦についての文章や目取真俊の別作品を読ませ、より立体的に教材を読み深めることを目指した。

五、授業の実際

(一) 単元全体の構成

目取真俊「魂込め」(計 一〇時間)

- ①音読(一・五時間)
- ②ワークシート(二時間)

③グループワーク(三時間)

④各班の発表(二時間)

⑤読解課題への取り組み(二時間)

⑥まとめ(〇・五時間)

(二)それぞれの学習活動の概要

①音読

指名により全文を音読する。その際、大きな出来事や登場人物の人物像が読み取れる箇所、沖繩の風習などが表れた箇所をチェックさせる。

②ワークシート

初読の感想・疑問点のまとめ、意味段落分け、段落ごとの内容のまとめ、本文を読解するうえで重要だと考えられる問題の作問など、ワークシートに沿って個人での学習活動に取り組む。

③グループワーク

六人一班とし、クラス全体を六班に分けた。次の(1)～(6)の課題を与え、各班が重複しないようにそれぞれ別の課題を選択させた。そうすることで各班に責任感を持たせるとともに、全ての発表が完了した際、重層的に本文の内容を理解できるのではないかと考えた。

(1)全体のあらすじと作問

本文をいくつかの意味段落に分け、内容をまとめる。読解するうえで重要になると考えられる、本質的な問いを三問程度作成する。

(2)登場人物の人物像

ウタ、幸太郎、フミ、村の有力者、オミト等の性格、境遇、立場など、読み取れることをま

とめる。

(3)沖繩の言葉の特徴と、小説における表現効果
本文で使われている言葉を踏まえ、調べて考察する。

(4)沖繩の信仰・風習

「神女」による「魂込め」や、自然、生物の表象など、本文に出てくる事象を踏まえ、調べて考察する。

(5)沖繩と本土(ヤマトウ)との関係

現代における両者の関係(心理的側面、経済的側面、沖繩人の大和人への見方、本土の人の沖繩人への見方等)、戦時中の両者の関係(「友軍」と沖繩の市民等)など、本文に出てくる事象を踏まえ、調べて考察する。

(6)沖繩戦

本文に出てくる事例を踏まえ、調べて考察する。

④各班の発表

調べたり考えたりしたことをスライド等の資料にまとめ、発表を行う。聞き手となる生徒には簡単な評価シートを配布し、内容や発表態度、資料の提示方法などについて多角的に評価させるとともに、質疑応答の時間を持たせる。

⑤読解課題への取り組み

上記(1)の班が考えた問題や教員側が準備した問題を解き、言語化することを通して、本文の主題や筆者の表現意図等を多角的に考察する。

⑥まとめ

作品の背後にある多様な問題の探究と、発問を通して本文を読解するという学習活動を組み合わせることで、より深い作品理解につながることを示し、今後の国語学習や読書においても応用していくよう指導する。その際、本単元の学習全体を振り返るアンケートを実施する。

(三) 実践における特記事項

① アンケートについて

初読段階で「沖繩と聞いてイメージすること」と「初読の感想や疑問点」を書かせた。また、学習後にも「沖繩と聞いてイメージすること」を聞き、学習を通じて沖繩への意識が変容したかを見た。また、学習形態や図書館資料、課題図書（後述）についての感想も書かせた。

② 公立図書館の協力について

新宿区立図書館の協力を得て、探究学習に公立図書館の本を活用した。同図書館では、団体貸出制度があり、一ヶ月間一〇〇冊まで借りることができる。沖繩の文化や言語、歴史等に関連する書籍や目取真俊の作品集など一〇〇冊を授業中自由に閲覧できるようにした。書籍の選定には、レファレンスサービスと蔵書検索システムを活用した。

③ 発表方法と資料の共有について

各班の発表については特に方法を問わなかったが、結果的には全班 PowerPoint によるスライド発表となった。また、発表スライドについては、学校で活用している Microsoft Teams

上に提出させて各自で閲覧できるようにしたうえ、冊子を作成して配布し、印刷したものを教室前にも掲示して視認性を高めた。

④ 課題図書について

本校では定期考査のたびに課題図書を指定し、「読書クイズ」として考査に出題している。今回は目取真俊の「水滴」「軍鶏（ぐんけい）」「神ウナギ」を指定し、読ませることとした。選定にあたっては、教材である「魂込め」と関連性が高い作品であること、短編として楽しめる作品であること、沖繩の文化・言葉・歴史等に触れられる作品であること、を基準とした。

六、授業を振り返って

以上の構想に基づいて実際に授業を行った。ここからは、その授業実践を振り返って実際の様子や反省点を記す。

(一) 音読について

短編小説とはいえ、授業で全編を音読するのは骨が折れた。ただ、本文中で数多く使われる沖繩の言葉に触れさせることも「探究」の端緒になると考え、やり通した。最初は「読み間違えたら起立する」などとゲーム性を持たせなければ集中力が持続しなかったが、物語が佳境に入るにつれて緊張感が自然と高まっていった。音読の場を共有する意義について改めて認識させられた。生徒の感想にも「朗読が良かった。一編の長い映画を見通したような感動があった

た」（原文ママ）などの声があった。

(二) 調べ学習について

図書館の本を活用できるようにした効果は大きかった。学校においても各人が何らかの ICT 端末を付与されている昨今、調べ学習となると、インターネット上の情報を切り貼りしてスライドにまとめるだけの活動に終始してしまうことが少なくない。しかし、本を手にとって閲覧するという環境があったことで、より詳細で専門的な内容に踏み込んで課題を探究することができた。また、現在では絶版となっているような資料的価値の高い書籍も多く、特に沖繩戦の写真資料や証言集などに触れたことには意義があった。

(三) 生徒の発表について

スライド発表は、生徒自身が発表者の立場となる点、発表者以外の生徒たちにも適度な緊張感と受容的な雰囲気生まれる点、スライドを作成する過程でより見やすく、理解しやすい資料にしようという意欲が生まれる点など、主体的・協働的な学習に適した面が多い。既述のように、調べ学習が比較的綿密かつ意欲的に行われたことで、発表の内容も総じてレベルの高いものとなった。班ごとにテーマを分けたことも効果的であった。班員の力量やモチベーションによって発表の質には差があったが、教員一人で前記(1)～(6)の全てを調べて講義するよりもはるかに充実した内容だったといえる。

(四) 読解課題への取り組みについて

全体の読解課題として「このアーマンがオミトの生まれ変わりではないか」「祈りはどこにも届かなかった」という作品末尾に近い部分に焦点を当てて考察させた。しかしインフルエンザによる学級閉鎖や多数の欠席者が出たという外部要因のほか、中間考査までの過密日程もあって最後は講義を中心とした授業形式となり、十分に読み深められなかったという率直な後悔がある。本来はこれもグループワークや発表などで考えを共有させ、生徒主体の読みを確立させたかった。とはいえ、沖縄の人々の信仰や海に対する特別な思い、沖縄戦の戦死者の無念さや鎮魂など、探究学習をもとにした考察が見られ、読解の深まりを確認することができた。

七、生徒へのアンケートから（まとめに代えて）

・「沖縄と聞いてイメージすることは何か」

【読解前】①海…53 ②食文化…40 ③シーサー…25 ④米軍・基地…24 ⑤気候（暑い・台風等）／沖縄戦…19（複数回答可、以下同）

【読解後】①海…45 ②沖縄戦…40 ③文化・信仰（しまくとぅば・御嶽信仰・マブイ等）…30 ④食文化…22 ⑤米軍・基地…21

↓読解前はゴーヤーチャンプルーなどの料理やシーサー、「暑い」など、皮相的なイメージを挙げた者が多かった。読解後は沖縄戦に加え、

本文でも取り上げられていた風習や言葉について挙げた者が増えた。当然といえば当然の結果だが、修学旅行前に沖縄の歴史や文化について意識付けができた。

・感想（抜粋、原文ママ）

○歴史や現在の姿、文化など様々な側面を知って、ただ観光地としての沖縄でない、生きた沖縄を知ることができたように思う。他グループの発表を聞いたり、発表についてメンバーの考えを知ることが、自分の中の先入観を取り払って沖縄を学ぶことができた。

○ネットの記事だけでは起きた事件などの客観的事実を淡々と書かれていたが、本では実際に体験した方の話などが書かれていて臨場感があった。

○ウチナーグチについて調べるうちに、言語を失うことはそのままアイデンティティを失うことになるのだなと思い、言語の重要性への理解が深まった。

○戦後70年以上がたった今でも根強く残る沖縄戦の被害や影響を、沖縄の土着の信仰の観点からみることで、新たな視点を得た。

○専門的な本は実際に取らない限り触れる機会はないが、今回先生が用意してくださった本はとても興味深い内容で、読みふけてしまった。実際に手に取って本を読むほうが、ネットで見るとよりも理解しやすいと思う。

○授業で細かく解説するだけでなく、生徒の

発表にゆだねていたわけですが、それでも結構理解が深まるし、逆に主体的に生徒たちに任せられることも大事だなと今回わかった。

○自分の考えが正しいか、他の人に受け入れられたのかは分かりませんが、自分で調べ、発表する形式だったので、各授業でいつもより頭を働かせて考えることができました。

○沖縄が現在に至るまで日本化を強要され独自の文化・言語を失わざるを得ない状況になってしまっていたことを知った。授業のような機会がないと、ただ基地の多いリゾート地という感覚で留まっていたと思う。

○自分はあらずじをまとめる班だったので、他の班のように色々調べて生き活きとした発表が羨ましかった。

○自分なりの解釈が組み立てられるような授業は、またやってほしい。

○課題図書とても面白かった。シリアスで重い感じもあったが、日常生活の描写や方言が頻出する目取真氏の作風もあって物語に没入した。

○小説にここまで思いが込められているとは思わなかった。戦争についての部分は心情を読み取るのがつらく、ページをめくる手がなかなか進まなかった。

↓自ら調べる、発表する、他の生徒の発表を聞くという学習過程がいかにかに生徒の知的好奇心を刺激するかが分かる。課題図書や図書館貸出本の閲覧についても肯定的な感想が多かった。